吉田城址　発掘現場公開資料

令和３年３月 20 日（土）　主催：豊橋市文化財センター

時間　10:00 ～ 11:30、13:30 ～ 15:00

吉田城について

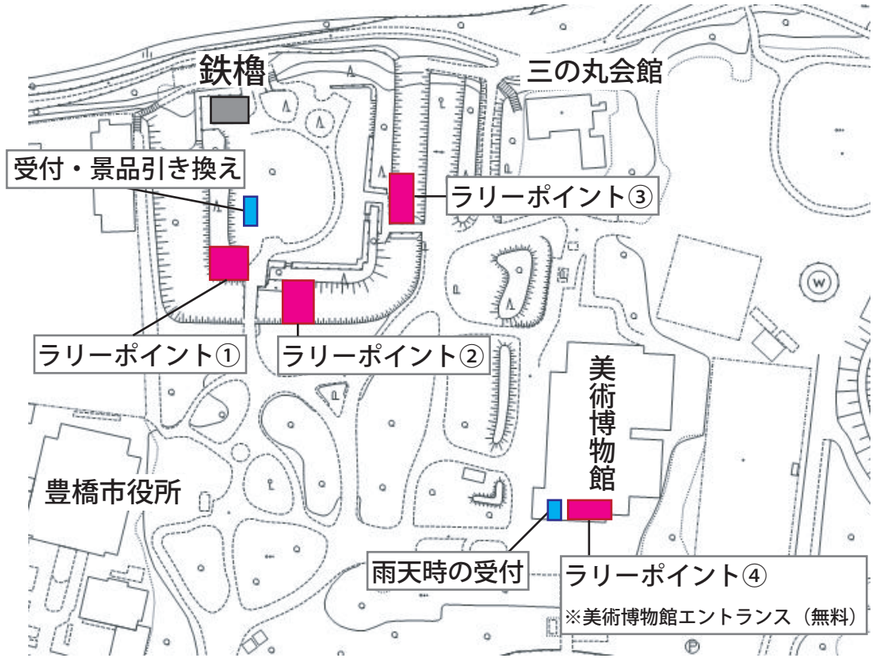
戦国時代の地方都市今橋に築かれた今橋城（いまはしじょう）は、後に名を「吉田城」と改められ、東三河地方を支配する政治の中心を担っていきました。

牧野氏や戸田氏といった東三河の国衆や駿河・遠江の戦国大名である今川氏が城主を務めた後、松平（徳川）家康の東三河支配の時には筆頭の家臣であった酒井忠次（さかいただつぐ）が城主を務めました。家康の関東移封に伴い、豊臣秀吉の重臣たちが関東の押さえとして東海道沿いの城に配置される中で、吉田城では後に姫路城を築く池田照政（輝政※）が城主となり、天守を伴う壮大な城に改修しました。

関ケ原の合戦の後には、東三河の中心地として、多くの譜代大名が入れ替わり城主となりました。吉田城は徳川将軍が京都へ上洛する際の宿所として利用されるなど、池田照政の在城時に引き続き、整備が進められました。　※一般的には『輝政』で知られていますが、吉田城在城時には『照政』と名乗っていました。

見学場所とスタンプラリー設置場所

今回の現場公開では、現在発掘調査を進めている場所以外にも、令和２年度に新発見された、あるいは公開した成果を巡るスタンプラリーを実施しています。



ご確認ください

雨天の場合は、イベントの内容を変更する可能性があります。

それぞれのポイントへの行き方については、公園内のスタッフにお尋ね下さい。

見学に際しては、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、人数制限等を行う場合があります。

スタンプラリー

※スタンプは各ポイントの担当者が押印します。
※景品数には限りがあります（午前・午後各 200 個）。
※雨天の場合は、スタンプラリーをとり止め、自由見学とします。

ポイント①	ポイント②	ポイント③	ポイント④	景品引き換え

ラリーポイント①

千貫櫓（せんがんやぐら）台から出土した、様々な池田照政期の瓦

千貫櫓は、本丸南西隅に築かれた三階櫓です。近年、櫓を支える石垣（櫓台）の損傷が目立っており、平成 30 年度から発掘調査を行っています。

調査では、新旧２時期の櫓の礎石と考えられる遺構が発掘されています。また特に注目されるのは、建物の地固めと考えられる遺構です。これは櫓の規模（東西５間 × 南北４間※およそ 9.0×7.2m）と推定される範囲の外郭線に沿って、大量の河原石と瓦が埋め込まれているものです。ここから出土した瓦は、いずれも池田照政が城主であった天正 18 年～慶長５年（1590 ～ 1600）の遺物であり、当時の吉田城の姿を検討する上で、極めて重要な遺物と言えます。

左上：巴文軒丸瓦（ともえもんのきまるがわら）
右上：桐文軒平瓦（きりもんのきひらがわら）
左下：輪違瓦（わちがいがわら）
右下：巴文小菊瓦（ともえもんこぎくがわら）

※今回展示している資料の一部は、令和元年度に発掘されたものです。

このうち、軒平瓦にあしらわれた桐文は、皇室から豊臣秀吉に与えられ、更に秀吉から重臣に授けられた特別な文様です。また小菊瓦・輪違瓦は、建物の大棟（おおむね）や破風（はふ）を装飾するためのもので、城郭に用いられるものとしては全国でも最古級のものです。特に巴文を意匠とした小菊瓦は、全国的にも他に例がありません。これらの遺物は、いずれも建物の屋根を荘厳に飾るために用いられたもので、池田照政期の千貫櫓が、格式の高い建物であったことを示す資料と言えます。

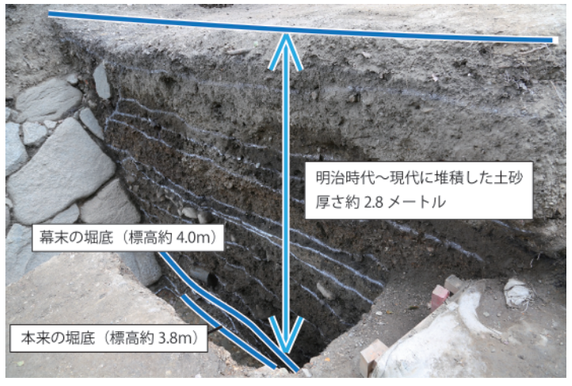
ラリーポイント②

南多門（みなみたもん）に築かれた、吉田城最大級の高石垣（たかいしがき）と腰巻石垣（こしまきいしがき）

南多門は、吉田城本丸の正面入口に築かれた施設です。一階が門、二階が櫓となった非常に堅牢な構造で、城の守りの要となる出入り口《虎口（こぐち）》を、土橋や塀、石垣と共に固めていました。

今回調査を行ったのは、この南多門から連続して築かれた石垣です。調査の結果、堀底は築かれた当初から約３m埋没しており、元々は 12.6mもの高さを誇ったことが確認されました。これは、吉田城最大である鉄櫓（くろがねやぐら）下の石垣（高さ 12.7m）に匹敵する規模であり、城郭の最重要箇所の一つである本丸入口を堅牢に固め、かつ荘厳に飾る目的があったと考えられます。

石垣に用いられた石材の大半は花崗岩で、石を切り出した際のクサビの痕跡である『矢穴（やあな）』や、石材表面の調整加工である『ハツリ』が確認できます。築かれた年代については、①非常に規模の大きな石垣であることから、15 万 2 千石もの領地を有した池田照政在城時（1590 ～ 1600 年）とする考え方と、②築城の名手として、江戸城や名古屋城の普請にも関わった江戸時代初期の吉田藩主、松平忠利（ただとし）の在城時（1612 ～ 1632 年）とする２つの可能性が考えられます。



左上：発掘された石垣
素割の花崗岩を中心に、『打ち込み接（うちこみはぎ）』と呼ばれる工法で築かれています。

右上：堆積していた土砂の様子
江戸時代を通して堀底は丁寧に清掃されていましたが、幕末に発生した安政東海地震（1854 年※嘉永地震とも）以降は管理が行われなかったようです。特に明治～昭和時代を中心に、不要な土砂やゴミが大量に捨てられ、急激に埋没していきました。

左下：発掘された２種類の石垣
写真左側が高さ約 12.6mの高石垣、右側が高さ約 2.1mの腰巻石垣です。腰巻石垣は、調査前は完全に埋没していました。

高石垣の他にも、腰巻石垣（こしまきいしがき）と呼ばれる高さ約 2.1mの石垣が確認されました。これは土で築かれた法面である切岸（きりぎし）の基底部を堅牢にするための構造で、本丸南東の切岸全体を巡っています。また築かれた年代については、高石垣と同時期と考えられます。

ラリーポイント③

吉田城址２例目となる、池田照政期の石垣

城址全体の石垣の状況を把握する調査によって確認された石垣です。現在でははっきりと姿を見ることができますが、つい半年ほど前までは、ほぼ全体が腐葉土や雑草によって覆われていました。

石垣は現況で高さ約 5.7m、幅約 13.8mを測りますが。一部は埋没しており、実際はより大きかったと考えられます。チャート材を中心に、自然石を組み合わせて石垣を築く、「野面乱積み」という技法が用いられています。また江戸時代中期頃に部分的な崩落が生じ、花崗岩によって修復されています。

ラリーポイント④

吉田城の復元鳥瞰図（ちょうかんず）

江戸時代の吉田城は、約 83 万 7 千㎡もの広大な敷地に、櫓や御殿が立ち並ぶ壮麗な城郭でした。

考古学・文献史学を専門とする学芸員が、発掘調査成果や古絵図を基に考証を行い、城郭鳥瞰図の第一人者である香川元太郎（かがわげんたろう）さんの手により、全盛期※の姿が甦りました。

吉田城の南東から描いた構図となっています。城下には東海道の宿場町や湊町が広がっており、当時の賑わいを感じることができます。

※惣堀 (そうぼり) が水堀となった承応 (じょうおう) 3 年（1654 年）から、大地震により本丸御殿が倒壊する宝永 (ほうえい) ４年（1707 年）までの期間としました。